

虫こぶ ～昆虫と植物のコラボレーション～

ケヤキハフクロフシ (ケヤキ・ハ・フクロ・フシ)



これは何なの？ 「毎年、これが増えて困ってるんだよ。中から虫が出てくるんだ。」
4月12日、数学の〇〇先生が、不思議な葉っぱ（上記の写真）を持ってきてくれた。葉っぱに生えた「こぶ」は確かに異様である。きっと、珍しい生き物もしくは現象に違いない。そういらんだ私は、県立博物館の富永さんに、「**こぶの生えた葉っぱ**」について電話で聞いてみた。すると、「おそらく、虫こぶと思われるが、虫こぶ自体はそう珍しいものではない。」との話であった。新発見でなくとも、ちょっとした珍品であることを期待していたので少しがっかりしたが、気を取り直し、「虫こぶ」について調べてみた。

ようこそ！虫こぶワールドへ。 なんと、「虫こぶ」は独自の文化誌を持っていた。そのため、「日本原色 虫えい（虫こぶのこと）図鑑」、「虫こぶハンドブック」、「虫こぶ入門（虫こぶの見方・楽しみ方）」など多くの本が出ており、おそらく、「虫こぶ愛好家（こぶらー?）」は全国に確実にいるだろう。**虫こぶ恐るべし！** ところで、日本では、これまでに1400種類以上の虫こぶが見つかっており、それぞれに名前がついている。例えば、川島先生が持ってきてくれた虫こぶは、その後、植物の専門家に写真を送り鑑定してもらったところ「ケヤキハフクロフシ」である可能性が高いことがわかった。この名前は、**ケヤキ(植物名)・ハ(葉、虫こぶができる場所)・フクロ(形状)・フシ(虫こぶの和名)**という規則で命名されており、名前からどんな虫こぶかがわかるしくみになっているのだ。

虫こぶをつくることができる昆虫はだいたい決まっている。それぞれの昆虫ごとに虫こぶをつくることのできる植物も1種かせいぜい数種に決まっており、**昆虫の出す化学物質**が植物を刺激し、植物の細胞が異常に増えすぎたり、大きくなったりして、虫こぶができるのだ。まさに、**昆虫と植物の合作(コラボレーション)**なのだ。昆虫は、卵から成虫になるまで、この「虫こぶ」のゆりかごの中で生活するのである。

佐高付近で、虫こぶを探してみたところ、けっこう見つかった（下の写真）。
「なんじゃこれは？」という**キテレツなもの**は、虫こぶである可能性が高い。なるほど、**虫こぶワールドは、かなり奥が深そうである。**



↑ 部室棟南側にある「しだれ桜」の葉

